

そのマンションの部屋を選んだのには、理由がいくつもあった。まず一つめは、部屋が三階にあつて、裏手が大きな寺の境内に面していること。境内には「保護樹木」の指定をうけた樹齢二百年を超える銀杏の木が植わっている。その張りだした枝が、ちょうど2LDKの六畳間の窓のま下にあつて、いざとなればとび移ることが可能そうに見えたからだ。

二つめは、部屋のオーナーは、税金上の理由でこの部屋をまた貸しにしている、そのせいで借り主の名前や素姓を一切詮索しないことだ。あいだに入っているのは、兜町の金貸しで、しばらく愛人にしていた銀座のホステスを住まわせていたのだが、仲が終わって空き部屋になった。女房をひどく恐がる男だから、女と切れたあとも、管理を任されている部屋の存在を秘密にしている。

三つめは、ごくありきたりだが、防犯カメラ付のオートロック機構を備えていることだった。高見良一がその三つの理由でこの部屋に住むようになってひと月半がたつ。そろそろ「本部」の結論がでそうで、しかもその内容についても見当がついていた。もしついでいなければ、東京とはさつさとおさらばしていたらう。

だがいずれにしても用心に越したことはない。それまで住んでいた南麻布のマンションを夜逃げ同然にでてきた、あの八月のむし暑い晩まで、じつくりと時間をかけてこの部屋を探したのだ。いっしょに住んでいた、二十一歳の六本木で働くホステスは、その十日前に、ハワイにいくと告げて荷物をもつてでていっていた。アダルトビデオの女優になったという噂もあったが、高見はその仕事も長つづきするとは思っていなかった。

とにかく湯水のように金をつかうのが好きな娘だった。車だろうと洋服だろうと、人がうらやむようなものを入れてやらなければ、すぐにヘソを曲げるのだ。七月の終わりに、買った三カ月足らずのフェラーリを沈めたときから、こうなることは見えていた。「別れの予感」と呼ぶには現実的すぎる展開だが。

ビデオ女優が思ったほどは金にならないと気づけば、すぐにも新しい男をつかまえるだろう。

腐るほどのあぶく銭をもつた男の匂いを、敏感に嗅ぎわけることのできる娘だ。

どちらにせよ潮時だった。二十一歳という若さで、SMから何からすべてひと渡りし尽した娘の飽くなき欲求に応えるには、半年間の同棲は長すぎる。「朝・昼・晩、いつでも、どこでも」が、あの娘のキャッチフレーズだった。いつでも、どこでも、には、四十二の誕生日を一月に迎えた高見の体はいささか応えづらい。「男盛り」と、ただの「盛り」の意味がちがうことを、とうとう納得させられなかった。

高見は、周囲からは、用心深くて頭の切れる男だと思われていた。それは半分以上事実だが、ときおり、そう一年に一度くらい、頭の血管が本当に切れる音が聞こえるようなことがあつて、そうなる自分でもまるで信じられない無茶をしでかすのだった。

その無茶のひとつが、あの娘とのつきあいだった。娘のことは、まわりに知られざるをえ

なかったが、他の無茶は今のところごく限られた人間にしか知れていない。

業界には、自分に關する評判がひとり歩きするのを好む手合いが多かったが、高見はちがつていた。ひとり歩きしてほしいのは、今定着している「用心深くて頭が切れる」という評判で充分だった。「切れると何をしてくすかわからない」という評判は、「実は頭が悪い」という噂に変化しかねず、そうなつたら、今のような状況では「水ぎわの犬を打つて」ひと儲けしようとなくらむ、もつと頭の悪い連中の相手をしなければならなくなる。

それだけご免だった。高見の辞書では、「頭が悪い」というのは、「忍耐がない」と同義語で、そういう連中ほど始末に困る手合いはいない。

寝返りを打ったとたん、急に目がさめた。腕時計をはめて寝る癖がついていて、のぞくと、ダイヤモンドを埋めこんだ八百万の文字盤が現在時刻を三時半だと教えた。

少しむし暑い夜で、高見は境内に面した窓を細めに開けて眠っていた。

なぜ自分が目ざめたのか、ぼんやりと考えていた。布団をしいただだけの六畳間は殺風景で、このところ部屋にいればいつも読んでいる中国古代史の本が十数冊と寝酒にしたカミユのボトルにグラスがあるきりだ。

そうか、虫の音だ。

気づいたとき、ミシツという、かすかな軋みが玄関の通路から聞こえた。

ドアに吊るしておいたカウベルも鳴らなかったとは奇妙な話だ、つづいて高見は思った。昔の喫茶店でよく見かけるようなカウベルを、高見は眠るときにドアの内側に吊るしている。

このマンションを選んだ、四つめの理由が、内装は新しいものの築十五年、というところにあった。玄関とリビングを結ぶ通路の下の根太が傷んでいて、少しでも重みがかかると、さつき聞こえたような軋みがたつのだ。

虫の音がまず止んだ。それが高見の目をさませたのだ。虫は、六畳間のすぐ窓辺でも鳴っていたのだ。

まず心に浮かんだのは、面倒なことになった、という思っただけだった。眠けが勝っていたために、まだそのていどのことしか思いつかないのだ。

つづいて思ったのは、何人いるのだろうか、という疑問だった。

一人ということはない。一人だったらお手上げだ。一人で乗りこんでくるようなら、まず拳銃をもっていて、使い方に自信のあるようなプロだろう。素手のこちらに勝ち目はない。それに、一人なら、目的ははっきりしている。一対一で、「さっさう」だの「痛めつける」はない。

「消す」あるのみだ。

それでも高見は膝にまとわりついていた毛布をそつと外し、中腰の姿勢をとった。首の長いカミユのボトルをつかんだ。キャップがしっかりとしまっていることを手探りで確かめる。いざというときに酒がこぼれて手がすべりませんでしたでは、洒落にならない。

リビングルームと六畳間の境いには、襖紙を貼った板戸がある。今はごく細いすき間を残して閉まっている。

湿度が高いこの時期、滑りは決してよくはない。

と思っている間に、その細いすき間から数本の指がのぞいた。

どうやらそれほど慣れた玄人くろうとではない。これから「仕事」をする相手の部屋に忍びこみ、中5

となれば、次の行動もパターン化している。

高見は怒った猫のように布団から跳ね起きた。

がらつと板戸が開かれ、

「高見い、天誅！」

金切り声の叫びがした。同時に日本刀の抜き身が光ると、布団めがけて黒い影が突進する。

侵入者は二人だった。あとの方の役目は大きめの懐中電灯で「仕事」を照らす仕事だ。

だがおおむね、そういう役回りを果たす側の方があがっていて、失敗する。

だから光が六畳間を裂いたとき、パンチパーマに剃りを入れた若造が、だんびらを誰もいない布団に突っこんでいる間抜けな姿が煌々と照らしだされる結果になった。

高見は隠れていた板戸の陰から一步踏みだすと、カミユのボトルの底を若造の顔面に叩きこんだ。

ガラスの割れる音、鼻骨の碎ける音が、決して派手ではなく響いた。カミユのボトルは底が厚く、コップが割れるようにはいかない。

若造は声もたてず転がった。死にはしないだろうが、顔は何十針と縫う羽目になる筈だ。

照明係は、ひつという声をあげた。高見は、若造の手から落ちた日本刀をすくいあげた。白木の柄つかの安物だ。ポン、刀といったところで、一人でも刺せば、刃がこぼれ目釘めくぎがゆるむような大量生産品だった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。